

# 『また逢う日まで』

もりまりこ

5145文字

あらすじ

毎月、14日が訪れると葉は酔っぱらっていようが疲れていようが、フローリングを無心に磨くことを課していた。

ただひたすら、床を磨くのは。

かつて短いあいだ、この部屋で、公一と共に暮らしたことを、忘れないために。

荷物をからだのあっちこっちに抱えたまま、鍵をがちゃりと閉めて、部屋に戻ると静かな空間が待っている。

棚の上にならんでいる韓国のお土産の梨のカタチの小物入れや、ちいさなブーケ、<スペイン展>でもとめた黄色や緑が大胆に散りばめられた花が描かれたコップがまったく昨日とおなじ位置にあるはずなのに、すこしだけ、遠い。

10月はじぶんにだけ訪れなかったんじゃないかと思ってしまうぐらい、足に車輪をつけて坂道を転がるみたいに過ぎていった。

ありとあらゆる見知らぬ人と、さまざまな言葉を交わして日々が流れてゆく、感じ。子会社に出向になって、緊張した日々が続いていた。

誰かとほほえむことはあっても、弾けたように笑うことはない。みんなどこかで気を互いに遣いながら、社交だけは保たれているそんな日々。

そんなのあたりまえだって知っていたはずなのに、すこし身に堪えていた。元の職場が懐かしくなったけど。元の職場だって居場所だった感覚なんか、なかったはずなのに、焦がれているじぶんに葉は呆れていた。

よそよそしいっていうのは、違うけれど。どことなくそこらへんにあるクッションやぜんぶカタチの違う椅子たちが、所在投げな感じなのだ。

そして、煩雑に置かれた資料と新聞の商品情報の記事がとにかくちらかっていた。

それよりもなによりもフローリングがうっすらと、つやをなくしている。

ソファに腰をすずめたまま液晶画面の中で咲いている薔薇の花の花びらも、いつもより色褪せて見えた。画面を撫でる。ほこりだった。ほんとにもう、ほこりっていったいどこから来るの？ って独り言ちながら冷蔵庫のドアに貼つてあるカレンダーを見て、どきつとした。

忘れてた。って低い声が誰もいない部屋に放たれる。

さっきまでが14日だってこと忘れてた。ごめん、公ちゃんって叫んだ。

2年前の初冬とつぜん、亡くなった公一の月命日だったことをすっかり忘れていたのだ。

葉は月命日だけは、酔っぱらってしようと疲れてしようと、フローリングを磨いたりして、とにかく掃除に専念することに決めていた。

決して掃除好きじゃないのに、葉がそこまで必死になって掃除するのは公一が、かつてここにいたことを確かめようとする行為だったのかもしれない。

初七日が、ちばんきついと思っていたら、四十九日過ぎても哀しみのジャブを受け続けている感じで、どんなふうにも日々が過ぎていったのか思い出せない。

とつぜんなにかを失うと、そのぼっかりとした空間を埋めようと、つとめるものだと知った。

ただ、密かにふたりで一緒にしたことをなぞりたい気分だった。

そして思いついたのが公一と必ず週末に勤しんでいた掃除だった。

だから毎月14日は、葉なりにきちんと部屋を整えて床をみがいた。

光っている床を指の腹で摩ると、明日がちゃんと迎えられそうな気持になった。でも、今日の日付は不覚にもすでに15日になってしまっていた。

はじめてふたり暮らしたこの賃貸の部屋。入居日の初日。

かつて誰かが住んでいた面影がないぐらいに、まっさらになるまで床を磨こうって公一が言い出した。

ほうきでフローリングを掃く時に、公一は「床の隅から」っていっしゅん語気をつよめる。まるで唯一の得意科目を教える親戚のお兄さんみたいに。

はいはいって言いながら、公一の言われる通りにやってみる。

たしかに、角からせめてゆくと効率がいい。

あらかじめほこりを取り除いた床を拭くために、濡れたお掃除シートを本体にセッティングしようとしたら、公一はみずからバケツに水を入れて、ぞうきんをしぼった。

えー、ぞうきん？ って今時、ウェットシートで十分じゃんって言ったのに聞き入れてくれない。葉はしぶしぶ、冷たいバケツの中に手を入れてぞうきんを適当にしぼった。

なのに今度は「ぞうきんのしぼりかたが弱い」ってどこかの口うるさいおじいちゃんみたいなことを言う。それでもけらけら笑って気にならなかったのは、きっとふたりでいるその状態だけが、じぶんの唯一のたいせつなエリアだと、信じていたからかもしれない。

ほんとに公一は掃除魔だなんて思いながらも、葉の後ろ脚がバケツの水をひっくり返して、フローリングが水浸しになりそうになって笑い転げたりして、日が暮れた。はじめての部屋の窓からみる夕焼けは、香ばしそうな茜色だった。

公一はずっとお父さんと2人暮らしだったから、転勤先に移る度にふたりで、掃除していたらしい。彼のその掃除方法は、たぶん亡くなったお父さんから伝授されたものなんだろう。

公一の掃除する手や指のずっと向こうに、逢ったこのない彼のお父さんの手や指のたたずまいがふと、浮かんで消える。

どこかでなにかが繋がっているような。親が子に伝えるって、もしかした

らそんなことなのかもしれないと、葉はわけもなく甘美な気持ちになった。

掃除を終えた時、なにかわからないすがすがしい気持ちに取り囲まれた。

すこしだけ、未来を期待してもいいような瞬間が、その磨くという行為の中に含まれているような気がして、なんとなく公一をみた。

夕陽に照らされたほこりっぽい顔にうっすらと、あごに髭が生えていた。

もしかしたら、公一との濃密なふたりの時間はその掃除のなかにしかなかったかもしれないと今になって思う。思い出の輪郭はくっきりとしていて辛いから、それを打ち消すように葉は立ち上がる。

さ、始めようとフローリングシートをセッティングして、ぼんやりと床の真ん中辺りに滑らせた時、「・・・床の隅から」って聞き覚えのあるくぐもった声が出た。空耳かと思って、もういちど床の真ん中を掃こうとした時。

「・・・だから、・・・壁の隅からだって」

えっ？ うそ。いまの公ちゃん？ 公ちゃんなの？」

「・・・そう、俺」

しばらくして、声がかえってきた。

えっ？ どういうこと。どこ？

「どこって？ ここ。アムヒヤ。ほらほら、・・・手が休んでる」

葉はわけがわからないまま、フローリングをモップで掃く。ちゃんと床の隅から。

わたし、いまおかしくなった？

「べつに、おかしいっちゃおかしいけど。葉がおかしいのは今に始まったことじゃないだろう」

ふざけないで、説明して。

「だからねっていうか、俺もあんまりわからないんだけど。・・・来月三回忌だろ。そしたらあっちでのスキルが上がったのかなんか知らないけど、葉に逢いたって思ったら、気づいたらここに来てた」

ここに来てたってみえないけど。

「そりゃ、ゴーストじゃないもん。だから声だけの出演って感じ？ で、次はフローリング磨くんだろう」

そうじゃなくて。なんで、さっきまでそこにいた人みたいに喋るのよ。

「だから、あっちのことははじめてだからわかんない。転勤したてみたいなものだから。新顔はいつだっておろおろするだろう」

出向先にいるじぶんのことを言い当てられたみたいで、ぞくつとする。理不尽に思いながらも、この状況が呑み込めないまま葉は床を磨く研磨剤のようなもので、ただただ無心に磨こうと思って、液剤を布に染み込ませていた。

「俺が死んでから葉、ずっと怒っていただろう。怒っていたのは知ってたけど、どうしようもなく。ただただ見守っていましたよ」

うそばっか。口から出まかせだよ。

「うそじゃねーよ。付き合ってたころも葉には嘘ついてない。じゃ、証拠を聞かせる。葉は律儀にも俺の月命日には、徹夜してでも掃除に励んでいただろう」

そういうの、ぜんぶみてたの？ っていうか見えるの？

「うん。だから見守ってたの。ほら、そこそこまだほこりが残ってるとか。もうちよい右にずれたら、完璧にぴかぴかだとかね」

うそ。うそじゃなさすぎて、公ちゃん怖いんだけど。

「じゃ、消えようか。今すぐ。できるかどうかわからんけど」

それは、困るの、やだ。消えたりしないで。

「・・・ほら、・・・葉の足元のテーブルの猫足の下。まだ磨けてない」

だから、こわいって。こわいけど、ずっと喋ってて。

その後も公一は葉の掃除の手元に注意を促しながら、声を届けた。

葉はその刹那なんとなくあたりから笑い声が聞こえたような気がして、天井を見上げる。

ね、いま、笑った？

「あ、聞こえてたんだ。葉は地獄耳だったもんな」

ね、いちいち過去形にして言わないで。

そのとき、ふたりのあいだに風のような瞬間が訪れて葉はふあんになる。

ね、もういないの？ 公ちゃん？

「・・・。いや、俺もいっしょにそこ磨きたいなって思ったからさ」

今度は、葉が笑った。

「いま、葉、鼻で笑った？」

うん、聞こえてたんだ。笑ったよ。だってそっちに行ってからまだ掃除好きなんだなって思ったらおかしすぎて。

ふたりで笑ったあと、ほんとうの静けさがそこに訪れる。

ふと公一の声がとぎれとぎれになってゆく。

「きれいになったじゃん。ゆかもぴかぴかで」

窓の外がとっぷりと、よるのよるにつつまれているのがわかった。

「じゃあね。しおり」

じぶんの月命日には、葉が掃除し始めた頃にぜったい声だけで駆けつけるって約束したまま、公一の声はそれっきり聞こえなくなった。

ささやかな部屋の床は、ぴかぴかになっていた。

指でフローリングをさする。すべすべだった。

公一とふたりで磨いたねって眩くとふいに、涙の雫がこぼれおちた。その楕円のような形が、コーティングされた床の上に輪郭を保ちながら、ゆれていた。